パラシュートガール

A2468

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
パラシュートガール

【Ｎコード】
Ｎ３７９０Ｉ

【作者名】
Ａ２４６８

【あらすじ】
スカイダイビングものです。

1

落ちるっていうよりも、むしろ浮いているみたいだ

都築澪は降下中、ずっとそのように感じていた。寒い冬のある日、外気は冷凍庫並みの温度、インストラクターとタンデムで降りているにしろ、飛行機の中の緊張した感じとは違い吹っ切れていた。

部隊の忘年会の抽選で貰ったタンデムスカイダイビングのチケット、高所恐怖症でもある澪にとっては拷問を受けるような感じをずっと持っていた。

やがてパラシュートを開き空中遊覧状態になる。雪をかぶった富士山や都心の高層ビルなどが見える。澪は今までとは違う世界を感じていた。

一生忘れことはないだろう空を浮くような感覚、その快感を覚えた澪、それからというもの澪はスカイダイビングの虜になっていた。

数ヵ月後、都内のある飛行場、外は雲が垂れ込め霧雨が降り肌寒い。朝早いこともあって、人もまばらである。澪は慌てながら飛行場の中に入る。すでに先客がいる。そのうちの二人は澪と同じクラブ所属の千歳とはるな、あとの二人は見慣れない顔であった。

澪たちはイベントで飛行場内に上空からパラシュート降下の展示をするために来たのである。彼女にとっての大仕事である。澪は頑張っている姿を見てもらいたい人がいた。

メインゲートが開き客が入場する。雨のせいか例年より、客足が鈍い。その中に望月直人の姿もあった。

直人と澪、幼馴染である。澪は小さいとき両親が事故でなくなり祖父母に預けられた。その祖父母も澪が中学生のとき相次いで亡くなり、叔父夫婦預けられ、直人のいる村を離れた。

連休も終わった週末のある日、望月直人は農作業を終えて、機械をトラックの荷台に入れ、家に帰ろうとしている。
太陽は西に傾き、だいぶ涼しくなってきている。
トラックで家に帰ろうとしたとき、あぜ道で脱輪した車を見つける。制服を着た女性が途方にくれていた。
「大丈夫か。家まで送ろうか。」と声をかけ、修理する。「ありがとうございます。」
彼女は直人の顔を見る。どうやら見覚えがあるらしく、直人のことじろじろと見ている。
「ひょっとしてあなたは望月直人さん。」「そうだ、君は澪か。」
「そうよ私は都築澪、陸上自衛隊朝霞駐屯地会計課所属の自衛官よ、今回は祖父の7回忌のために5年ぶりに里帰りしたわ。」と直人に向かって敬礼をする。

しばらくは二人とも忙しいこともあり、音信不通状態になっていたが数週間前、直人のもとに一通の手紙が「今度、航空祭でパラシュート降下に参加します。降下地点は滑走路脇の空き地に12時に着地します。絶対に見に来てね。」小さいときは華奢だったはるながスカイダイビングをやっているとは彼にとって夢にも思っていなかった。
たまたま稲刈りも終わったこともあり、夜行バスで上京してきた。
直人ははるなの姿を探したが、飛行場自体が広いため、喫茶店で時間をつぶすことにした。
その頃、定期便乗り場の一角の事務所、横にはセスナ機が横付けさ

れている。
事務所の中に、男女１０人ほどがいる。男は３０～４０歳位の体格の良い男性が、女は２０歳前後の一見すると高校生くらいの容姿である。
男はマヤたちの所属している「ブラックナイトパラシュートクラブ」の代表など地上のバックアップ組、女は降下メンバーである。澪たち三人と残りの二人は面識が無く今回が初顔合わせである。一人はハーフのリサ、もうひとりは小柄だが胸の大きい飛鳥である。
「今日のジャンプの件だが管制や気象台に確認したところ、雨が上がり薄日がさすということなので降下する方向で待機になった。今から準備に入りあと３０分後に離陸し、その３０分後に飛行場の端の広場に降下する。最終判断は降下直前である、降下高度は１万フィート、すぐにパラシュートを開き着地すること。降下前に無線で連絡する。」
彼女はほっとした表情で話を聞いている。彼女たちは中止になるのではと内心思っていたからである。
そのうちの一人、迷彩柄のタンクトップを着てとスパッツを穿いた岩崎はるなは話を聞きながら眠っていた。

はるなは「はるな、起きて。」と彼女を呼ぶ声で目が覚めた。
声の主は飛田千歳、はるなとはいとこ同士ではるなに誘われスカイダイビングをはじめはるな以上に病みつきになっている少女である。
「はるな、パラシュートをつけて。」と千歳がせかす。残りのメンバーは私服の上からパラシュートをつけ、飛行機の中からの飛び出しの確認をしている。
今回は澪たちのクラブの備品を使うこともあり、飛鳥とリサは入念にチェックしていた。

空は雨がやんでいた。離陸まであと３０分、彼女たちは臨戦態勢に入っている。

2

３０分後、ジャンプスーツを着て、ヘルメットを片手に持ち、パラシュートを背負ってセスナに乗り込む彼女たち。風は肌寒く、雲の隙間から薄日が差している。
セスナの片方の扉が開けられた状態で離陸する。彼女たちはスタッフに手を振っている。彼女のほかに航空祭のカメラマンも同情している。やがてセスナは動き出し空に向かって地上を離れていった。
彼女たちは３０分以上の飛行の後、高度３０００ｍの上空から降下する。セスナは上昇していく。それにつれ、隣の競技場や人家や道路も小さく見えるようになっていく。
扉が開いている為、冷たい風が吹き込み、顔に当たる。彼女たちは寒さと緊張のあまり黙っている。
しばらくして緊張が解けたのか高度計を確認したあと千歳が口を開いた。「はるな、打合せの時も眠そうにしていたけれど。どうしたの。」
はるなは「話を聞いていたら眠くなって、そして初降下のときのことが夢に出てきた。あのときは緊張していたわ。」
と答える。彼女は初降下のときの話を始めた。

はるなとスカイダイビングの出会い、それはひょんなところから始まった。

スカイダイビング、それは富士山くらいの高さから時速２５０キロのスピードで急降下する為、究極のスポーツとも言われる、そのため危険なものと考えられ、愛好者は多くない。
そのためイベントでの降下以外では河川敷で細々と行われることが多い、体験者もタンデムが大多数で、一人で飛ぶことは珍しい。

半年前、春休みの週末、はるなはいとこの家に遊びに来ていた。すっきりとした青空、湖が一望できる公園。陽気が良く鳥が舞っている。
そんなとき、青空を見上げると黒いパラシュート型凧のような物体が浮かんでいる。気になったはるなはその物体の舞う方向に走り出す。
凧の方向を追っていくと凧は湖畔に消えていく。はるなが戻ろうとしたときまた凧が現れた。今度は目を離さずに消えた方向を走っていく。
すると、人がぶら下がっているが見えてきた。「こんなところでパラグライダーかスカイダイビングの訓練しているなんて。」
はるなはパラシュートの降りた広場を見つけ、様子を伺っていた。空き地にはいかつい男が１０人くらいと荷物が置かれたブルーシートと円形のトランポリンらしきものと自動車が数台置かれている。

「健太、記録は１０ｃｍだ。いつものお前らしくないぞ。」どうやら何かの記録をとっているらしく。一人の男が電光掲示板に映し出された数字をメモに書き写している。
しばらくして、はるなのことに気づいたらしく、一人の男がはるなのことを見つけ「こんな場所で何しているのか。」と声をかけた。
「スカイダイビングをやってみたいのです。高台から景色を見てたら目に入ったのでここにきました。
ぶら下がっていた人が気持ちよさそうだったので、今からやらせてください。」はるなが切り出す。男は不意を突かれ、「お嬢さん、このスポーツは誰でもできるというものではない。やるなら訓練を受けてもらうぞ。危険がつき物だから。」「じゃあ、次回にお願いします。誓約書を書きますから。」「分かった。じゃあ。」といいながら男はワゴン車に戻り申込書を持ってくる。さらに続けて「ここにも書いてあるが入会金は１万円、レンタル装備は一日借りて千円、ジャンプ代はヘリ代込みで１ｍ１円だ。あとひとり立ちするま

では装備のレンタル代だけでよい。用具を揃えたくなったら俺に言え、俺たちが手配してやる。もうそろそろ次のメンバーが降りてくるころだ。今回は女の子が一人で降りてくる。」「女の子がいるのですか。」「彼女は自衛官だ。タンデムを経験したあとに降下を始め、何回か経験したの子だ。。うちのクラブは彼女以外は自衛隊とそのＯＢのクラブだから野郎だらけで全体で２０人くらいいるが、月１・２回の定例降下と夏休みに合宿しているが活動しているのは１０人いるかどうかだ。そうだ俺の名前を言うのを忘れていた。俺の名前は大島隼人、自衛官だ。」

「私は岩崎はるな、１６歳高校２年生、空から飛び降りることは怖くないですか。」「怖さなんか一瞬で吹き飛ぶさ。外国なら女の子にも楽しんでいる。」

そうしている迷彩服を着たはるなよりややの背丈高い女が着地し、周囲から祝福の水をかけられていた。「女の子だって訓練さえ受ければ楽にできる。暇な日があれば俺に連絡しろ。」と隼人ははるなに携帯の番号を紙に書いて渡した。

「スカイダイビングを始める。」彼女の決心は硬い。

数日後はるなは近くのスーパーでアルバイトを始めた。黒の長髪が特徴の美人であるが運動神経は鈍く、内面的な子（趣味は本を読むことと料理）でもある彼女。家に帰ってからも付近をランニングしたり、休み時間も腕立て伏せをしたりと体を鍛えだした。

それもすべてはスカイダイビングのためであった。

友人もはるなの変身に不思議がっている。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3790i/

パラシュートガール

2010年11月14日01時31分発行